

青春スクロール

母校群像記

saitama@asahi.com

「最後の空襲」

焼け跡から新たな歴史

熊谷女子高校（以下、熊女）は先の大戦終結前夜に米軍のB29爆撃機が熊谷を襲った「最後の空襲」で、前身の熊谷高等女学校校舎の大半を焼失させられた歴史を持つ。

その空襲は1945年8月14日深夜から翌15日未明にかけてあり、266人が犠牲になった。

高女2年生だった森田と志子（90、49年卒）は、その年の4月から学校の近くにあった軍需工場へ勤労奉仕に出ている。「熊谷高女報国隊」の腕章を巻き、ネジやピストンのような兵器部品をつくらせた。学校が休みだった8月14日も勤労働員だった。夕刻、現在の



熊女創立時の正門の門柱（現在は北門）は鈴懸の大樹とともに空襲に耐えた

県立熊谷女子高校⑦



市役所近くにあった自宅に帰り被災。自宅は全焼したが、近くの用水脇に避難して無事だった。9月には焼け残った軍需工場を仮校舎として授業が再開した。体育の授業や休み時間は焼け跡の片付け。冬まで続いた。片付け作業はつらかったが、仮校舎から高女本校まで大声で合唱しながら歩いたことが楽しい思い出として残った。

森田の妹、元中学校英語教諭の新井志づ子（87、53年卒）は空襲があったとき、国民学校5年生。姉と同じ体験をしたが、熊女時代の思い出は姉とは全く異なる。戦後、現行につながる「6・3・3制」が47年から始まった。新井の

代は男女共学の中学校で3年間過ごした1期生。50年に熊女に入った。迎えてくれた先輩の品格のあたる歩き方、話し方に感激した。「においまで私たちと違っていた」。48年に第1校舎、49年に第2校舎が完成した。英語部に入り、文化祭で英語劇「ベニスの人」を披露した。どてらを着て高利貸シャイロック役を熱演。友人から「和製シャイロック」と冷やかされた。

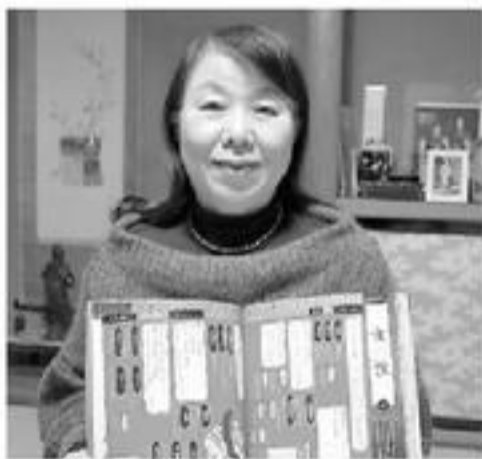
元小学校教諭の米田主美（76、64年卒）は熊谷空襲が始まった日に生まれた。熊本出身の軍人だった父が熊谷陸軍飛行学校の教官として赴任し、市内の下宿屋の娘だ

った母と結婚。父は米田が母のおなかにいたころ、九州で戦死した。

熊女時代に熱中したのは映画鑑賞。学校のそばに洋画専門の映画館があった。「太陽がいっぱい」「ティファニーで朝食を」「風と共に去りぬ」などの名画が次々と上映された。「英語の勉強になるから」と先生に勧められ、英語圏ではないが、イタリアやインドネシアの人たちと文通した。

熊女が校舎を焼失した2カ月後の45年10月の着任以来36年間教壇に立ち続け、「熊女の生き字引」と呼ばれた長島三子（故人、40年卒）。その娘で国士館大学非常勤講師の長島淳子（67、73年卒）は母の後を追うように日本史の研究者になった。

森田（左）が長女、新井が次女。戦後生まれの三女も熊女の卒業生



米田は「熊谷空襲を忘れない市民の会」代表。悲惨さを伝える本の出版を続けている

長島淳子は前総合女性史学会代表。大学で女性史を講じ、一般向けの歴史本にも原稿を寄せている

「今じゃ考えられないけど、幼稚園のころから熊女に入り浸りだった」。母の机がある部屋に入り込み、そこで勉強したり本を読んだりしていた。熊女での一番の思い出は3年秋の体育祭。クラスごとの仮装行列は一揆をテーマにした。ルーム長だった淳子の発案だ。悪代官とその妻の役は先生が担い、生徒は粗末な服装の百姓、一向一揆風の僧兵の姿に変えた。百姓2人と僧兵3人の計5人とは今、SNSでつながっている。

敬称略